

第3回「日本人のだいすきな芸術家」

春です。さくらが咲いて散りました。春です。

ところで、ぼくの話です。この通り無粋な男ですので、桜が綺麗どうこうは一切思わないのですが、しかし、よくよく考えてみると不思議です。だって、決まって春になれば咲き誇り、二週間も経たずに散ってしまう。当たり前かもしれませんが、桜は一年という四季を知っていて、わかっている。

馬鹿がおまえはという感じですが、素直に子供のような疑問符でもって考えを巡らせてみると、ちょっとめまいがするほどの不思議だと思えます。そうして公園のベンチなんかには深くだらしなく腰かけて、酒をあおりつ目を細めて桜を仰いでみれば、桜って、桜って、桜なんだなあ、みつを。なんて感傷的な気持ちにもなってきます。ときに風が吹きます。強く、弱く、春のうるんだ風が吹きます。桜が散って、舞って、文字通り桜ふぶきとなります。そこに春の光が縦横無尽に駆け抜けます。幻想的な光景が広がって、おや、酩酊が幻覚か、目の前をぞろぞろと通り過ぎる、この世のものとは思われぬ、光り輝く女の群れ。

なんていう幻影を見たりするのは、キチガイ（精神病者という響きでは伝わらないニュアンスがあるため、あえてキチガイと表現させていただく）か芸術家あたりでしかない。つまり「ふつう」ではないのだと、昔から世間の偏見の相場は決まっている。しかしながら、とにかくこれはアートコラムであるので、今回はキチガイではなく後者の芸術家、関根正二（1899 - 1919）をご紹介します。

まずは、先に触れた彼の見た幻影を描いた代表作「信仰の悲しみ」について、所蔵元の大原美術館がある岡山県倉敷市のホームページより下記転載。

彼の代表作である「信仰の悲しみ」は大正7年第5回二科展に出品され、樗牛（ちよぎゅう）賞（※）を受けました。原色を用いた不思議な幻想、非現実的な雰囲気で一躍注目を浴びました。本品を描いていた頃の関根は極度の神経衰弱に陥っていたもので、関根の目には様々な暗示や幻影がはっきり見えていました。日比谷公園で数人の女性が行列になって歩く姿に、眩い光に包まれている状態を見出したことから描かれた幻想的な作品です。関根はその後も創作活動を続けますが、惜しくも20歳の若さという短い生涯を終えています。

※樗牛賞＝二科展の新人賞

転載終わり。

ちなみにこの作品は国宝・重要文化財に指定されている。が、しかし、既述の逸話をそのまま受け取れば、これは“幻覚”を描いた作品であって、1960年代半ば、若い世代を中心として世界的に流行したサイケデリック・アートと変わらないのではないかと。ちなみにサイケデリック・アートとはLSDなど麻薬を使用したときに多々見られる幻覚や幻聴をもとにした作品群である。要するに、イカれた時に見たり聞いたりしたものを表現したということである。そんな反社会的な作品を国宝・重要文化財に指定するとは何事か！

なんてことを言われないのはなぜか？ 関根正二の場合は“ナチュラル”に幻影を見たから問題がないのだろうか？ それはまあ置いておいて、関根正二は日本人のイメージする芸術家像の典型の一人であろう。日本人の大好きな芸術家は、だいたいが貧乏かつ病弱であるが情熱だけは無限大なのである。これにピタリと当てはまるのが関根正二その人である。彼の活動期間は、大正4年（1915）から8年までの5年間で、絵具に困るほど貧しく、しかしその絵画にかける情熱たるや狂気じみており、おまけに風邪から肺炎をこじらせ20歳の若さで他界。言ってみれば、清貧芸術家のロイヤルストレートフラッシュみたいな人物である。

それにつけても、日本人の一般的な芸術家イメージはいまだにこのレベルで停止しているから呆れてしまう。私なども、いまだに親戚などから「画家は死んでからじゃないと売れないんでしょ？」とかいう寝ぼけたことを言われて辟易することがままある。馬鹿も休み休み言えという話である。ルシアン・フロイドの裸婦像が、存命中に36億円で落札されたのを知らんのが馬鹿者。

日本人のアートに対する理解が先進国中ダントツで最低なのは、いまだにこのお深頂戴な清貧芸術家イメージが地縛霊のごとくまとわりついて離れないのが一番の原因ではなからうかと、ぼくは真剣に思う。

だからまずは、芸術に対する敷居や偏見を取っ払って、ごくふつうに、当たり前前に考えてみてほしい。作品を作る以前に生きること自体お金がかかることなのだし、元氣じゃなければ何もできないし、情熱だけではなんにもならないのである。そんなこと、当たり前ではないか。なぜに芸術家だけが血へどを吐きながら、息も絶え絶えで頑張らねばならないのか。いくら変わり者の芸術家だって、お金はそこそこ欲しいし、血色もよく毎日元氣でほがらかに、はりきって作品を作りたいのである。当然ではないか。

もう、清貧を崇拜しありがたがるような馬鹿馬鹿しい価値観は、いい加減やめようではないか。そして捨てて、他の先進諸国にあるアートの文化レベルへと進もうではないか。

現代アートにおいては、もはや“素の”裸の大将みたいな芸術家は存在し得ないのだ。あるのはただ、視聴者を意識して作られた虚構の物語の中で明確なコンセプトをもって“演じられている”裸の大将でしかない。というか、そのような文脈における裸の大将にしか価値はない。それが現代アートである。